常滑市民俗資料館

友の会だより

第13号

緑に映える海の城・大野城（別名宮山城）

平成5年3月発行（1993）

海の城雑考

前教育委員長　平野清吉

民俗資料館の館長さんに突然「何でもいいから一筆書いて欲しい。」と依頼された時には、少々面喰いました。

とも角、日頃、文章というものをほとんど書いたことのない私でございます。

従いまして、恥を忍んで駄文を弄しますので支離滅裂である事を最初にお断りしておきます。

さて、何でもよいというご注文に困り果て、考えに考えた末、私の父、仙之助が７年前に出版した「海の城」（たくさんの方々にお世話になりました。）の拾い読みから浮かんだ空想を書き連ねることにしました。

これは、あくまでも根拠のないことですので本紙にのせて頂くにはふさわしくありません。

「海の城」をご一読願った諸賢におかれましては父仙之助がたいへん佐治城に心を傾注していたことはお判りになると思います。

私も父に言いふくめられた訳ではありませんが子どもの頃から青海山にはよく遊びに行き佐治神社にもよくお参りをしました。

あの頃の風景は今と違ってごく素朴で伊勢の海を見渡すのに絶好の位置にありました。

従って、佐治与九郎は宮山城の物見櫓に立って、大野水軍に思う存分采配を振ったことと思います。

西の口の沖が船の難所と昔の人は言っていたようですが、一方水軍に攻撃をされる難所であったかも知れません。

さて、宮山城の由来は、この地に寺院を建立した良忍上人が名付けた「宮山寺」によるものと思われます。

良忍上人（後の聖応大師）は知多郡司、秦氏兵曹道武を父とし、母は、熱田神宮の大宮司の娘であったと言われています。

その頃の地形は、現在とずいぶん違ったものであったと思います。

良忍上人は、富田の荘（今の東海市富木島町）に住んでおられたのですが、当時、交通の主な手段は、船でしたから、この宮山までは、東海市の富木島から船で往来し易かったと思います。

そして、良忍さんのお母さんの関係から、熱田の宮とも関係が深かったので宮山寺と名付けたのではないでしょうか。

平野仙之助著　海の城

宮山寺建立は1100年代であったと思われます。その頃は、沢山の堂宇が建てられ、この地は中世まで、知多半島でも屈指の文化の地であったと思われます。

その証拠に、今でも宮山地区には大門、油手、西申堂、金連（宮山寺は後に、「金蓮寺」と呼ばれるようになった）仏供田、北仏供田等の地名が残っています。

そして、13世紀からは、一遍上人の念仏道場にもなりました。

しかし、戦国時代にはこの景勝の地も格好の要塞として使われるようになり、大野水軍の砦となってしまったのです。

元来、この地は、融通念仏宗の開祖、良忍上人（聖応大師）が理想とした平和を尊ぶ聖地で

あったのです。

そこへ、血なまぐさい砦を築けば、それ相応の結末が訪れるのは、止むを得ないことと思われます。

しかし、良忍上人が唱えられた「自分の唱えた念仏は、他の人に幸せをもたらし、他の人が唱えた念仏が、自分に幸せをもたらす」という互恵平等の精神は、今でも生きずいています。

それは、大野谷虫供養（県無形民族文化財）が、悠久400 年の昔から絶えることなく続いているのが何よりの証拠であると思われます。

この虫供養は、別名「佐治供養」とも「武士供養」とも呼ばれています。

とも角、この青海山は、平和を愛する聖地であります。私は何とか、この自然豊富なたたずまいをいつまでも大切に守ってほしいと思っています。

平和の島の“やきもの”はいま（二）

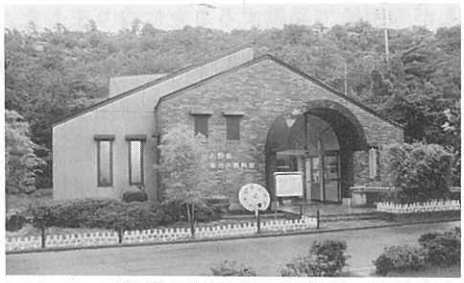
―大久野島・元毒ガス島から―

村　上　初　一

この大久野島に陸軍が化学兵器製造機関を設けることに決ったのは、昭和２年（1927）のことで、最初は単なる試験工場として計画していたようですが、当時島内にあった農家３戸を忠海（たゞのうみ）へ立ち退かせ、昭和４年（1929）に東京第二陸軍造兵廠忠海製造所（のち火工廠の文字削除）が発足、本格的に毒ガスの製造を始めたものです。生産が盛んになるにつれて、機密保持の為、昭和10年代には瀬戸内海の地図上から遂に大久野島を抹消、やがて日華事変の長期化に伴い、昭和15年（1940）、島内に陸軍技能養成所が設立され、忠海近郷の各高等小学校の生徒が３年間この養成所で教育を受けると、成績次第で本部（東京）の技術院へ進み、将来技術関係の軍人になれると、盛んに入所を呼びかけることになります。

夢多き少年達は、希望に胸を膨らませ入所すると、20年間の雇用契約と秘密の厳守を強制、自己都合では絶対辞めることはできないというものでした。

養成所は３年間、技術系の軍人を教官として化学工業学科、普通学科、実習科、教練科の学習をし、終始軍隊式の厳しい教育が行われました。また時には毒ガス製造の罪悪感を払拭する為、“お前達は将来皇軍兵器の製造技術者になるのである。化学兵器いわゆる毒ガスは広い範囲で多くの中毒者を出す性質があり、あくまで敵の戦闘能力を低下させるもので、単に殺害を目的としない極めて人道的な兵器である”と言われましたが、毒ガスに対する恐怖感が消えることはありませんでした。



大久野島毒ガス資料館

学習はすべてが厳しく、検査工室の実習ではイペリット（糜爛性毒物）の実験液を手につけて、反応実験もしました。

軍事教練でも島内の行軍中、実際に催涙ガスを使って防毒面の装着訓練を行い、呼吸が困難になって倒れる者も出るほど厳しいものでした。

３年間の養成期間が終ると、少年達はこの島を大苦之島と蔭口を言ったりしておりましたが、

中にはここで死ぬよりいっそ戦場へ行こうと、陸海軍へ志願する者も出はじめましたので、間もなくこれも禁止されることになります。

太平洋戦争が始まると、16歳から19歳までの若い人が徴用されて大勢入って来ましたが、馴れない危険作業で毒ガスにやられる人が多数でることになりました。

資料館の内部

常滑の渡邉さんが広島から社用で、この島へ出張して来られたのは、恰度そんな頃だったと思います。

戦争が激しくなりますと、学徒動員で中学生や女学生までも来るようになり、風船爆弾を作ったり、防空壕堀りや、毒ガス容器の運搬などに従事するなどで、この頃は毎日約３０００人もの人が専用船で通勤することになりました。

太平洋戦争が遂に終戦を迎えますと、昭和21年（1946）からアメリカ軍が監督する下で、毒ガス製造設備はすべて焼却又は爆破によって処理され、更に毒液約1800トン、毒液缶930 トン、くしゃみ剤990 トン、10キロガス弾約3000発を遠く土佐沖120 kmの海中深く投棄され、くしゃみ剤大中小合わせて約23万５千個、発射筒約42万２千個は、島内の防空壕に埋め、その他毒物56トン、催涙棒約2800箱、催涙筒約1900箱を焼却するなど、約１年を費して処理されました。

しかし、悲劇がより大きくなったのは、むしろ戦後毒ガスの製造が終ってからでした。

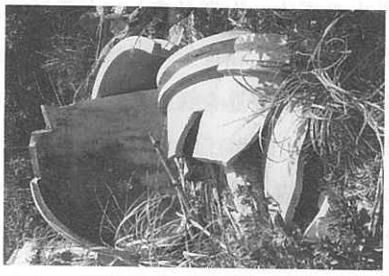
ここで働いていた人達の中から呼吸困難や咳、痰に苦しむ人が多数現われて来たからです。

この病いは、今この辺ではブラブラ病と言い、その30％は癌症状で、死者は既に1600人にも及んでおります。

これは毒ガスの後遺症であることは明らかですが、ようやくその救済措置が講じられるようになったのは、昭和29年（1954）に至ってからでした。

大久野島の過去について大変長くなりましたが、戦時中の毒ガス製造の実態と、その後遺症問題は次第に風化しつつあります。しかしまだ中国には日本軍の遺して来たらしいという膨大な毒ガス弾らしいものが話題になっておりますし、外国ではしばしば毒ガスが論議されており、これは単に歴史のひとコマではなく、今もなお人類にとって大きな問題に変りありません。

さて、渡邉さんから照会のあった毒ガス製造に使用した“やきもの”の内、破られずに残ったものは、大小様々の形で、ここ大久野島毒ガス資料館（昭和63年竣工）に多くさん展示してあります。



草むすやきものの残骸

これらが何処で生産されたものか、私もかねてから心当りを調べてまいりました処、マークの形からみて京都の陶磁器会社製のものは分りましたが、他は殆ど分りませんでした。

それに、毒ガス処理の際、裏山の深い谷間に捨てられた多くさんの破片がありますので、これも調べてみました。しかし渡邉さんの言うものは遂に見つけることができませんでした。

何れにしても化学薬品に強い“やきもの”が今

なお見学の人々に当時を物語る無言の証人として残っているのは、極めて意義深いことと思います。更にかつて地図から抹消されていた毒ガス島の大久野島が、昭和38年（1963）、全国で初めて島全体が国民休暇村になり、いま平和の島として蘇えったその裏山の深い谷間の生い繁る雑草の中に、人知れず埋もれる“やきもの”の残骸もまた、忌わしい過去を雄弁に物語る貴重な遺物に違いありません。

（広島県竹原市・大久野島毒ガス資料館長）

ぶらり下北半島一人旅

衣　川　俊　平

ＤＣ－９は快晴の空を快調に飛ばし秋田の男鹿半島を左窓に展開させながら高度をぐんぐんと下げながら逆噴射ブレーキをかけつつ高原に拓けた青森空港に無事到着。

用意された観光バスはコスモスの乱れ咲く長い下り坂を慎重に進み、丘のあちこちに点在する牛馬の放牧まきばを観光客に楽しませつつ青森市街を通り抜け今日の宿泊地薬研温泉に着く。

青森の名物はリンゴとホタテ貝、夕餉の膳には期待通り、獲れたてのまだ動いているホタテの刺身、小さいコンロの上の網には惨酷にも貝の殻のままのホタテが恥ずかしそうにポックリと口をあけ、これに特製のポン酢を一滴、辛口の地酒を口に含んでこの世の満足これ以上のもの無し、最高の極楽でした。

今回の下北の旅の目的は、凡夫の性を懺悔して恐山に参詣し亡妻の霊を慰めること、出来得ればイタコを通じ霊界での境地を知りたいこと、そして現世に戻りなば本州最北端の岬の海辺に立ってみたい、さらに欲張って奥入瀬の自然を残す日本一の奥入瀬渓谷をこの目で確かめたいことでした。

結果としては、イタコに逢うことができず残念、見物としては十和田湖遊覧や、仏ケ浦遊覧等しましたが、ここでは恐山を中心に報告させて頂きます。

肌寒い参道を境内に進む道すがら地元の人とおぼしき老夫婦に恐山とはどんな所ですかと聞いてみました。（みちのく弁での話なので正確ではありませんが私なりの翻訳です）

恐山にて筆者

恐山はこの辺に住む人々は、総てやがては一度必ず来るところです。死んでからでは遅い、生きている内に一度は必ずお参りし供養しなければ因果応報の前世過去の因報が得ず、弥陀の本尊に救われて極楽浄土で蓮華の花が頂けるとお地蔵さまが約束してくれる有り難いところ。<生の教えの文教哲学的な信仰の思いでした>

奥の院本堂に安置されているお地蔵さまは、今を逆のぼる1200年程前、桓武天皇の御世に開祖慈覚大師の作と云い伝えられている仏さまで慈悲深く、参詣される善男善女、このお山の佛塔は勿論、道に落ちている小石までもお守りしてくれているそうです。

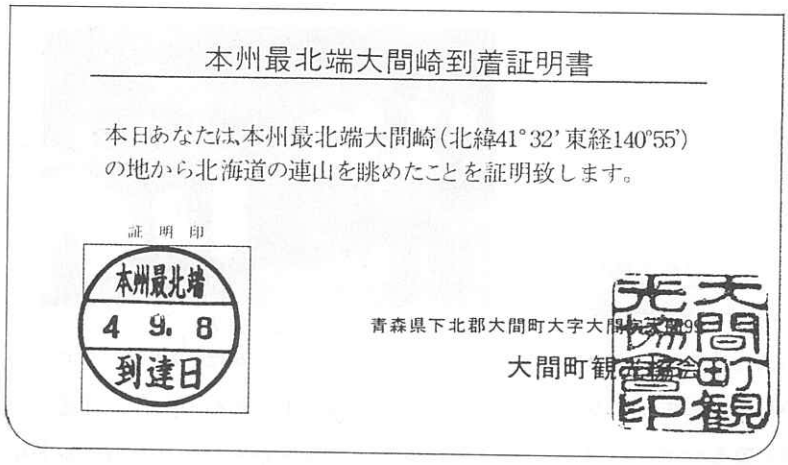
いとしい幼な子を失った母親、わが妻わが夫を失った人々、肉親を失った人々は夫々に思いを込めて卒塔婆を建てる、雨露を凌ぐためのビニールの風車、これが風を受けてカラカラと音

をたてて回る、草も木も一本も生えていない殺伐たる空間、これはまさしく悲恋の霊場です。

そんな静寂な中、静かな鈴の音とともに拡声機から地蔵和讃が聞こえてきました。

哀愁に満ちた御詠歌的なメロディーなのですが歌詞がよく聴きとれません、節々をメモしながらも時間に追われてバスに戻りその雰囲気に包まれながら恐山を去ることになりました。

乗車してまもなくガイドさんが、折角ですからお土産にして下さいと地蔵和讃のテープを流してくれました。



本州最北端大間崎到着証明書

本日あなたは本州最北端大間崎（北緯41°32' 東経140°55'）の地から北海道の連山を眺めたことを証明致します。

証明印

本州最北端 4 9. 8 到達日

青森県下北郡大間町大字大間字[illegible]

大間町観光協会

大間町観光協会印

〜これはこの世の事ならず＝死出の山路の裾野なる＝賽の河原のものがたり聞くにつけてもあわれなる＝／二つや三つや四つ五つ／十にも足らぬ幼児が／賽の河原に集りて／父恋し母恋し／恋し恋しと泣く声は／この世の声とは事変り／悲しさ骨身に滲みるなり／かのみどり児の所作として／河原の石を取り集め／これにて回向の塔を積む／一重つんでは父のため／二重積んでは母のため／三重積んでは古里の／兄弟わが身と回向して／昼は一人で遊べても／日も入りあいのその頃に／地獄の鬼があらわれて／やれ汝ら何をする／以下……

私は前世の科か折悪しくイタコに会うことができませんでしたが、恐山とイタコの存在は、切り離す事の出来ない事柄の様ですので、境内の売店で隠れ立ち読みしたイタコに係わる本に書いてあった事を要約してみました。

神さまに仕える巫女さんは神子（ミコ）と云い元来は末子即ち未婚末通の穢れなき子女のみに許されていましたが、後世に至り神職を離れた人のなかには、遊女白拍子となり庶民に混じり世相の中での潤滑油として暮らしたとか。

神様と違い、佛さまに仕える僧侶以外の女性を東北地方ではイタコと呼び、この地方には30から40人がいるそうで、その内多くの方は体のどこかが不自由な人とか、殊に目に障害を持つ人が多いと聞きました。

イタコを志す人は奥山に籠もり、高僧に付いて長い年月修行を重ね、免許状を授かった者のみが古里に帰りイタコとして生きるそうです。

イタコの普段の生活は普通の人と変わりないようですが、恐山の大祭とか諸行の際或るいは特に頼まれる時などには、免許状を背中に差して祈祷を行い死者との霊体と合体し、供養依頼者との間で口寄せをなさるそうです。　イタコと云う語源については色々あるようですが、信者が仏の霊を慰めるために卒塔婆を立てそこに戒名を書き、イタコはこの卒塔婆（板）に向かって祈祷することから板子（イタコ）と呼ぶようになったとかの説明がありました。

今回のぶらり下北一人旅の紀行記は恐山参詣を中心に据へての報告になりましたが、尋ね廻った所をご紹介して報告を終了いたします。

本州最北端大間崎海岸。津軽半島に面し巨大な石仏の自然像がある佛ケ浦。十和田樹海と呼

ばれる奥入瀬渓谷。皇族方がよく利用される渋沢別邸。十和田湖遊覧、等々でした。

知多郡代官所支配下の私札について（一）

中　野　健　三

我が国の貨幣制度の確立とお札の起こり

安土桃山時代の後半から江戸時代前期のころ慶長６年(1601)徳川家康が大判・小判・１分金・丁銀・豆板銀などをつくり、同11年駿府に同17年江戸にそれぞれ銀座を設置したのが始まりである。

《慶長の前が文禄、その前の天正年間に秀吉が天正大判・円歩金などを鋳造させた時の話は有名である》天正17年（1589）

当時金１両が銀50匁の割であった。

慶長年間19年次に元和年間９年と続くが金座銀座は日浅く、貨幣の国内流通量はどうしても不足勝ちで商取引は未だ円滑に行かなかった。

そこへ持って来て、銀貨を支払いに必要なだけ切ってつかう切り銀がご法度になり、端数の釣銭の支払いは大変不便であった。故に小額の銀貨が手元にない時、当座の決済用として、紙切れに銀○匁預りと書き、発行人氏名と判を押して相手に渡し、現金はある時払いの方法がとられることがあった。これがやがてお札へ発展したのである。

貨幣制度による影響

①貨幣経済の勃興　土地よりお金

②信用経済の進歩　札・為替・手形の使用

③商工業の発達　ゆたかな資本

④町人の台頭　資本の運用・経済生活

商業の発達

①市場の繁昌

②問屋と問屋組合（仲間）

③金融機関の発達

・両替屋の利用と手形流通

・掛屋（懸屋）　鴻池善右衛門ら

・札差（蔵前受取手形）

※掛屋はおもに大名、札差は旗本それぞれの在庫米や扶持米を担保とする金融業のこと。

米遣いの経済

徳川時代は米をもととして経済を営み、大名から武士に至るまで給料は米で渡され必要なだけをその時の貨幣に代えてもらっていた。

従って一般の物価も米の値段を中心としてたてられた。

一度大凶作が起これば貨幣は役に立たず結局その他の物に頼らねばならなかった。

すかし
若狭（ワカサ）入り
小浜藩米手形

藩札・私札

家康の亡くなる１年前の元和元年（1615）に幕府は大阪城の金蔵から黄金を運び出した。

当時の銭１貫文は金１分に当てた。

○元和３年大阪江戸堀で河人足手形として銀札７分を発行

○元和８年（1622）頃、相前後して、山田羽書宇治端書などの預り札が発行された。

これらが一般に紙幣の始まりとされている。

○寛文元年（1661）藩札も初めて発行された。福井藩発行の銀10匁・４匁札。後に６匁札。

○寛文６年には名古屋藩が銀札10匁・１匁・９分・３分を出した。

○延宝８年（1680）赤穂浅野家が銀５分札を発行。忠臣蔵札として珍札とされている。
○元禄14年（1701）殿中刃傷の結果、大石は民心を安んぜんと６分の償還。

これらの藩札は、明治初年にかけて全国で次次と発行されたが、藩によってはその交換率も異なり、高額券のある藩と無い藩によって流通額に若干の差があり、大きい藩が沢山参加しての札遣いであった。

お札の偽造防止について

○寛文６年に名古屋藩判書発行、長者町１丁目に判書場を置いたが１年後贋札を造った者が有り、新札を作って旧札と引替。10匁札通用禁止
○延宝４年（1676）11月鳥取藩贋札刑罰令出す。
○宝暦４年（1754）鳥取改判の銀札発行、備中の僧と百姓の贋札使用発覚し重罪として斬殺。
○安政２年（1854）２月岡山藩は第三の押掛判を施して贋造を防ぎ、３月１日以降押掛判なき札の内10匁札通用禁じ、新１匁札が出来ないので古10匁札の上部両隅を切り代用としたいわゆる耳切り札を使った。

江戸時代の有名な紙の産地は摂津の名塩村と越前の五ケ村であったが技術は極秘扱い、秘密を守る誓書も取った。

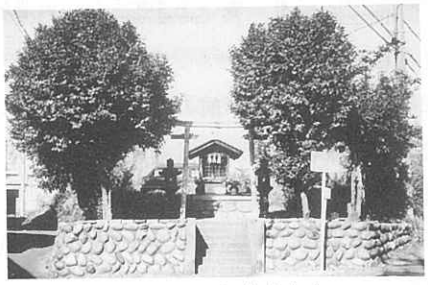
絵図柄・文字・紙質・すかし模様など綿密な技巧を加えて偽造の防止につとめた。

すかし入りの例　紙はそれぞれ藩専用のもの
　名古屋は尾の連続・宝の字続き
　津の飛地古市は古と一の字
　盛岡は丸菱と井桁に扇
　幕府は葵の紋入り

郷土史部会「北条の昔を探る」に参加して

中　野　晴　久

平成４年、郷土史部会は新規企画として旧村々の昔を地名を中心に探っていくことになった。



いちきのお庚申さま

北条村は、その第一候補となった。現在旧字名はその多くが新地名に変っており国道155 号線以西の北条中心部では旧名をとどめるものは原松のみであろう。宮下、中郷、狐塚といった名称は早晩人々の記憶から消えていってしまいそうな勢いである。幸い古い地図によって旧字名の名称とその位置は、ほぼ確認でき残された課題は、その名称の由来やその地にまつわる歴史的な事柄の記録ということになる。地名の由来が判明する例はけっして多くない。「狐塚」の地にはかつて稲荷神をまつった小祠と塚があり、「棚井戸」の地には簡易水道が引かれる以前、村人が利用した良い水の出る井戸があったなどといった判りやすい事例はけっして多くない。お宮の丘の下が「宮下」で屋根を葺く萱を採取した所が「萱場」「萱苅口」であろうとする推測は、ありえないことではない。この伝でいけば「蛇廻間」は蛇がたくさんいた谷の入りこんだ地形をもつ所であり、「師ケ谷」は両側に谷のある地形のため付けられた名称かと思えてくる。さらに「釜ノ脇」「窯平井」は近くに窯があってのことであろうと推察がつく。そういえば古くは保示地区をやはり窯ノ脇と呼んでいたが、どういう

関連があるのかなどといったことも浮かんでくる。同じように「小森」「羽根」「荒子」「上条」「原松」「仲井」などは、知多半島の中にいくつも同名がありそうな気がする。逆に「飛渡」「耳切」「乳母子」「夏敷」などは他にあまり例を見ないのではなかろうか。「夏敷」は近接して「梨木」があり、その転化したものと考えることができるが他の名称にはそれぞれ謂れがありそうだ。期間中に既述の推測を証拠だてるような証言や新発見はなく地名に関する伝承は予想以上に風化が進んでいるようだ。

地図の上に名を残さず人々の間で呼び慣らしている地名として「北山」「道場脇」という名称がある。前者は「北郷」の丘陵部を指し、後者については、「宮下」の一画を指すがその由来は判然としない。本誌第４号の渡邉榮造氏による興味深い論考「一向一揆と常滑」によれば北条地区には三河一向門徒が家康の時代に多く移り住んでいたとされ「道場脇」の道場は、あるいは一向宗（浄土真宗）のそれであるかとも推測されよう。

次に地名を離れて古記録に現れた北条を見てみると「寛文村々覚書」や文政二年の「北條瀬木両村入合図」（村絵図）に出てくる脇田池、夏敷池、飛渡池、二ノ田池などの池は今も変わらずあり、ホッとさせられる。このうち飛渡池は「寛文村々覚書」には頓戸池とあり、さらに明治９年の地図では椎池となっている。ちなみに夏敷池は今日、「なちき池」と呼んでいると思うが村絵図では「なつき池」、「覚書」では「なつしき池」となっている。

「覚書」「村絵図」がともにのせる山ノ神は現在神明社に合記されているが絵図からは今の共同墓地の近くにあったものかと想像される。山ノ神に関する伝承は、ほとんど聴くことができなかった。逆に飛渡、夏敷の奥には御嶽神社があり御嶽講による月並祭や祭礼が行われているにもかかわらず村絵図上にその姿は見えない。「覚書」には天神もまつられていたという。その場所はまったく不明ながら例の道場脇あたりに通称デンデン山と呼ばれる丘陵あり。これが天神山からきたものではないかなどと興味深い意見も聴かれた。また「村絵図」中に見える幸神は現在もまつられている庚申塔の入った小祀と思われる。幸神はどうも当て字と思われる。

北条村の氏神は、いうまでもなく神明であり伊勢の祭神、天照大神だが古くはダンベ船などにより海路伊勢参りをしている。この習慣は、市内各地の海沿いの村々で見ることができたものだ。

以上、郷土史部会の席に一、二度顔を出しただけで、さも全部を承知していたかの如き印象を与えかねない内容となった。今さら判りきったことをとの御叱責もあるかもしれない。しかし今北条に住む小・中・高校生、さらには大学生ですら、当地のため池の名前をいったいいくつ知っているのだろうかなど思ってみると、拙文もまたなにがしか関心をひくこともあろうかと思い編集長の需に応じた次第。今後、部会諸賢による一層発展した論議と記録の現れることを願って止まない。

（常滑市民俗資料館学芸員）

越前三国浦藤右衛門船漂流之記（二）

増　田　静　子

前回は遭難して帰国する迄の経緯を書きましたが、今回は生活、習慣、食物等を書いて見ま

しょう。

朝鮮の都での御馳走は、大きい膳に作り花を飾り、鶏や小鳥を丸ながら据え、魚其の外を高盛りにして６、70種類、又２の膳には餅饅頭色々の茶菓子を積み立是れも６、70種類ある。

『此二ツ膳ヲ給候テ後酒ヲ出シテ数度盃ヲ返シテ酒納リテ脇ヲ取申候其跡ヘ又膳ヲ二膳出シ申候是ハ食ノ膳ニテ三尺四方程ニテ御座候魚鳥ノ料理色々御座候汁五ツ菜ノ類ハ二膳ニ五・六十品モ有之候』

道中の大名の振舞も同じ様であった。

韃靼（ダッタン）国へ来た始めの頃は言葉も判からず、身ぶり手真似で両方互に判りあったが、委しい事は判からない。だんだん馴れて来て話も通じる様になったけれど、相手国の言葉を使う事は難かしく、２、３人が大分話せる様になったので、書付けて置いたが、細かい発音は書き分け難い。

韃靼国は越前国より西北に当り、日本人が殺された萱原の所から都迄は35日程かかり、道筋には田は一切見えず粟・稗等の畑がある。五葉の松の外は、日本と変りない様な山路や萱原を行き、宿も無いので野宿で食事を作り馬で行く。

人間は日本人より大きく見え、偉い人も下々の者も、『頭ヲ剃リ一寸四方程丸ク残シ毛髪ヲ長クシ三ツニ組ミ結上髢ハ其儘置下ヒラハ剃申候女ノ姿ハ頭ヲ真中ヨリ両方ヘ分ケ前ヘ引廻シ鉢巻ノ様ニ仕候』

正装した韃靼人（モンゴル人）

そして冬には毛皮で縁取りし天辺に房を付けた丸い帽子をかぶり、夏は小さい笠をかぶる。

着物は身上相応に差はあるが、形は同じで袖は細く手の甲迄かかり、脇下より裾広く仕立ててある。

韃靼の都は、二里四方程で王の住む所は、日本の城の様だが日本の城よりは雑に見える。角角に矢倉等もあり、『内二屋形町家ヒシト作リ置候テ御座候大方ハ日本ノ堂寺ノ如ク広大ニ作リ何レモ丸柱ニテ瓦ハ薬ヲカケ五色ニ彩色有之光リ申候残ラズ瓦葺ニテ結構ナル様子ハ無之只大キニ丈夫ニ相見候板ノ間ハ無之皆切石ニテ候』

韃靼国の惣王はチウチンといい８才になる。幼帝なので伯父のハトロアンス、キウアンス、兄弟他８人の重臣が補佐する。第一の臣はキウアンスで35才位、権力を持っていて直に口をきけず、外出の時町人達は頭を地に付け平伏するという。日本人には心をかけて度々御馳走に招待してくれた。ハトロアンスは兄で50才位、性質が荒く合戦でも勢よく攻め負けた事がない。

『大明ト韃靼合戦之時度々手柄有之テ城攻ノ時城中ヨリ降参可仕ト申候付王ヨリハ御救免可有ト仰セケレドモハトロアンス承引セズ城中ノ人、数万殺シ被申候』この罪として知行を減らされたが何も言訳をしない。この時韃靼国は明国に進出し、惣王も北京へ引越しをして来た。（この時から明が亡び清となって行く）

刑罪は割にはっきりしていて正しく行われる様だ。皆慈悲深く正直で偽りを言う事はない。金銀を置き忘れても盗み取る事はない。『但日本人ヲ殺候所ハ遠国故御法度聞謂不申カ御詮議ノ様子左様ニ相見ヘ申候甚御立腹ノ躰ニ御座候』

韃靼も北京も評定所を７ケ所置き、事が起ると調べ理非を書き差し出す。８人の重臣が見て依怙贔屓をしたり、調べ方が悪い奉行には罪金をかける。吟味した上で死罪に決った者があると、『王江申上其時猶モ天道御圖（オミクジ）御取被成死罪ニ致間敷トノ御圖下リ候得ハ重科ニテモ御救免有

テ或ハ無罪又割竹ノ削リタルニテ数ヲ定メ叩拂ニ成申候』死罪も鬮(クジ)で助かる事があった。又小罪の者は一度の罪は、人の身上誤りもあり仕事もある事だからと少し叩かれて放免され、二度目から法に従って罰せられる。他国から来て住む者は三年の間は許されるが、三年後は法通り罪せられる。

刀は腰にささず提鞘にし腰に提げている。武具は弓が第一で毎日弓の稽古をし、馬上にて自由自在に的を射て、其の矢を馬上から取り又射る。具足は日本の鎖かたびらの様なのを着し、馬を自由自在に乗りこなすうまさは言葉に述べ難い。戦場にて討死した忠節の人には加増され手負いの者には養生の為金銀を下さる。臆病で逃げた者は死罪、お家取りつぶし等、御法度の堅い事を下々迄よく守っている。２年程いたので話が出来る様になり、あれこれ聞いた。

韃靼人は寒さに強い。肌着を着て其の上に薄綿入を着、上着は毛皮を着る。大名はトンヒの皮といって藤色のむくむくと柔らかい毛皮でとても高価な物を使う。一般には羊狐その外の毛皮を着る。『羽織モ右ノ如ク毛皮ニテ仕候表何ニテモ袖ナシ羽織ニテ御座候日本ノ者ニモ下サレ候テ着シ申候殊ノ外暖に御座候日本ノ着物ハ惣体仕立広ク取分袖広ク着申候テ寒ク成不申候』暑さは日本と変りないが、寒さは日本の倍も寒いと書いてある。

このあと万里の長城を通って北京へ向います。

崋山のふる里田原町を訪れて

肥　田　花　子

爽かな晩秋も残り少なくなった十一月二十七日資料館友の会の研修旅行は、今回は少し趣きを変え動乱の幕末に大きく足跡を残し乍らも志半ばに、四十九才で自刃して果てた、渡辺崋山の生地、渥美半島の田原町を訪れた。

参加者五十余名で今回もバスは満席。八時五十分頃、市役所の玄関前を出発。

それ程の渋滞もなく、快適に走るバスから眺める窓外の景色は、行く程に田園が広がり目を楽しませてくれる。田は早くも稲のひこばえが緑の絨毯を敷きつめていて、今は滅多に見る事のない藁塚がぽつり、ぽつりと点在している。遠景の山裾は、紅葉、黄葉がとりどりに錦繡の彩をなし美しい秋の眺めを呈している。

平野を抜け、さしかかる山道を蛇行しながら登り着いたのが蔵王山。さすが頂上に佇むと風も強まり身が縮まる。見はるかす四方の下界も遠い山々も仄かに靄が流れていて、展望台に登って東方を望めば富士山が見えるとか聞いたがそこまでは視界が届かない。

“吹き上ぐる風に紅葉の散る見えて
蔵王の嶺はすでに冬づく”

次に着いたのが崋山の菩提寺として聞こえる城宝寺。門をくぐるとまず目を引くのが古墳・三間四方位あろうか、小さなこんもりした、この古墳は、大きな石組みの横穴式の円墳、暗くて奥まで見えないが石室のようだった、由来には何人のものとも記るされていないが、恐らくこの辺りを統べていた豪族の長であろうかと推定する。郡内では最大のものとあるが、古代をもの語る貴重な文化財で寺宝の一つ。

案内された霊牌堂は、大ぶりに区切られた格天井の一桝一桝に目を欺くまでの絢爛な花の絵が、当代一流の画家に依って描かれ正に百花繚乱といえる。室内の周りは書や扁額など、余す所なく掛けられて、これも皆一流書家の作品で、墨痕あざ

やかに、筆致の雄渾さは素人眼に見てさえも素晴らしく、つい足の運びが鈍くなる。

城宝寺をあとにしてグリル華で昼食を頂く。静かな座敷でゆったりと食べる和風の食事、歓談しながら充分に美味しさを満喫して、次の予定地の田原博物館に向う。

渡邊崋山筆、一掃百態
（重文、江戸市中の風俗絵本）の一部

ここに来てまず驚いた事は、崋山が良くもこれ程多くの絵や書を残したという事実である。武士と言っても小藩故に禄は低く弟妹も多く暮らしは苦しくて勉学よりもその日の糧に追われて長い貧苦を味わった。その中での書画の勉学、忠義にあつく主君に仕える事も並々ならず、遂に家老に列せられて、政治にも大きく手腕をふるった。努力の人でありその天分を生かして今に残っているのがこれらの作品である。

父巴州を描いた画像は、重文指定で中国の歴史に材を取った商山四皓の図、絹本極彩の襖絵、関羽の像、孔子聖像の外に俳画風のもの、母堂栄の像や、幽居中に描いた絵馬、獄中にあって素描した、奉行所の状況を描いたものなど貴重な文化財であり、死の一年前の作品「日月大黒天」など文化財中の貴重作ともいえる。

長男立へ宛てた遺書の切々と母への孝養主君への忠義を説き、渇しても二君に仕えるなと諭して、墓碑代りの遺書に、不忠不孝之父渡辺登と大書して遺した。いかに藩を憂い主君を崇め家族を思い暮らしていたか崋山の心情が酌み取れる。

“国を憂ひ主君を崇めて今際まで
私心持たざりし忠の人崋山”

崋山の卓抜な知識は西洋事情を早くより察知して、鎖国解除を主張し「慎機論」を書く、これ等が幕府の忌諱に触れ、思わぬ無実の罪科を問われ蟄居となる。そんな中で師が奔走して呉れて絵を書いた事が却って崋山の立場を悪くし、藩主に累の及ぶのを畏れた崋山は、天保十二年十月十一日自刃して果てた。

然し明治に入ってからその罪は解かれ、忠臣として画人として後世に名を残す事になった。

終わりに池の原公園を訪れて、崋山自刃の跡の残る屋敷を見学、庭の中央に、先程の不忠不孝之渡辺登の書を墓標にしてあり、屋内の自刃の跡で一同黙祷を捧げ冥福を祈る。その後道へ出たら、寒ざむと道の辺の秋草が風にゆれて一層冷えを感じさせる。帰りは海底トンネルを抜け一路常滑へ・・・鈴鹿の稜線に沈む夕陽を窓に眺めながら。五時きっかり市役所に到着。今回もまた楽しい旅の一日でした。皆さん本当にお疲れ様でした。

当会役員　高松久春氏ご逝去

当会の役員として長い間いろいろご尽力賜りました高松久春氏には、予て病気療養中の処、薬石効無く昨秋９月28日　69歳をもってここに逝去されました。

同氏は熊野神社宮司のかたわら常滑高校教諭として後進の教育指導に当られ、また常滑市文化財審議委員としても尽力されました。

ここに謹んで心からご冥福をお祈り申し上げます。

第13号、平成５年（1993）３月25日発行、発行所　常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4－203
電話（0569）34－5290　編集担当者　渡邊榮造　印刷　株式会社　興起社